

母性看護学実習における学びの評価と それに関連する因子

北林ちなみ・中山美香

Evaluation of the Learning in Maternal Nursing
Practice, and Factors Related to it

Chinami KITABAYASHI and Mika NAKAYAMA

要旨：本学科の母性看護学実習は、平成20年度から大幅に実習形態を変更した。これにより現在行っている実習内容の効果・学びの状態を評価し、今後の実習方法を再考することを目的とした。

母性看護学実習を終了した看護学科3年生100名を対象に、自記式質問紙を用いて調査を行った。結果として実習前の事例分析・学内演習は有効であり、外来実習の学びに効果がみられた。分娩見学の実施が分娩経過・看護の理解に影響していた。産褥期の経過・看護の理解を深めることは、母親・新生児の様々な変化の理解ができ援助につながる可能性が高かった。また、学生は多少なりのストレスを抱えて実習を行っていることが明らかとなった。

以上より、実習を効果的に行えるように講義の段階から考慮し、実習前の学習状況を把握していくことが必要であった。事前学習と実習に向けた準備がストレスを軽減し、実習の学習効果を高めることにつながると考えられた。また、臨床指導者との連携の見直しの必要性も上がり、実習方法の再考が行えた。

Key words : maternal nursing practice (母性看護学実習), nursing students (看護学生), evaluation of learning (学習効果)

緒 言

本学科における母性看護学実習の目的は、妊娠・分娩・産褥期にある女性および新生児に接することにより、学内での学習内容を再認識し、母性看護の実践に必要な知識・技術・態度を習得するとともに、母性看護の特徴を理解することと、生命誕生と育みを通して性と生について考えることである。実際に出産育児の経験がない学生にとって、学内での学習内容だけでは具体的なイメージが乏しく、看護過程の展開を用いての学習を困難にしている。しかし、臨地実習により母子とその家族と実際に関わることで理解し、看護援助を

考えることのできる重要な機会となり、看護実践能力の育成に役立っている。

本学科の母性看護学実習は、実習病院の産科病棟閉鎖により平成20年度から実習病院が1施設となり、大幅に実習形態の変更を行った。それまで病棟実習2週間であったものを、外来実習と学内学習1週間、病棟実習1週間となった。これを受けて、現在行っている実習内容の効果・学びの状態を評価し、今後の実習の方法を再考することとした。

研究目的

本学科の母性看護学実習における実習形態変更後の実習の効果・学びの状態を評価し、

得られた結果に関連する要因を抽出する。それを基に今後の実習方法の再考を行う。

研究方法

1. 調査対象

平成21年度と22年度に I 短期大学において母性看護学実習を終了した看護学科3年生100名

2. 調査期間

平成21年5月～平成22年11月

3. 測定用具

自己記入式質問紙を使用する。
調査内容

- 1) 事前学習の理解度・役立ち
- 2) 外来実習での学びの状態
- 3) 病棟実習における受け持ち褥婦の属性・受け持ち期間など
- 4) 分娩見学の状況
- 5) 実習終了時の理解度・援助実施状況
- 6) ストレスの種類と状態
- 7) 実習の有効性

4. 調査方法

母性看護学実習終了後記録物提出時に、対象者へ目的・倫理的な配慮について説明を行った後質問紙を配布し、回収は教員のメールボックスに投函してもらった。

5. 分析方法

質問紙の記載内容をデータ化してExcelに入力した後、統計ソフトSPSS18.0j for Windowsを用いて分析を行った。

質問紙の全項目について単純集計を行った。関連する項目については相関係数を求め、クロス集計により χ^2 検定を行った。

6. 倫理的配慮

対象者へは研究の目的・方法を説明し、データは研究以外に使用しないこと、個人は特定されないこと、提出は自由で提出しなくても不利益を受けないことを書面と口頭で説明を行った。また、質問紙の提出により同意したものとした。

表1 受け持ち褥婦の属性と期間

n = 78		
受け持ちの初経別	初産婦	37名 (47.4%)
	経産婦	40名 (51.3%)
	無回答	1名 (1.3%)
分娩形態	経膈分娩	68名 (87.2%)
	帝王切開	8名 (10.3%)
	無回答	2名 (2.6%)
受け持ち日数	平均	4.1±0.8日
	5日間	24名 (30.7%)
	4日間	40名 (51.3%)
	3日間	7名 (9.0%)
	2日間	6名 (7.7%)
	無回答	1名 (1.3%)

表2 分娩見学の有無と援助の見学および実施状況

見学・援助実施が行えた項目	分娩見学	44名 (56.4%)
	分娩時援助の実施	19名 (24.7%)
	新生児計測の見学	48名 (61.5%)
	胎盤計測の見学	35名 (45.4%)
分娩見学 分娩各期の 見学状況	第1期	14名 (17.9%)
	第2期	39名 (50.0%)
	第3期	29名 (37.2%)
	第4期	13名 (16.7%)

結果

質問紙配布数は平成21年度46名、平成22年度54名であり合計100名。回収数は平成21年度35名、平成22年度43名の合計78名であった。回収率78%、有効回答数100%である。

病棟実習における受け持ち褥婦の属性、受け持ち期間および分娩見学・そのほかの見学数と援助実施数を表1、表2に示す。

1. 実習前学習の効果 (事例分析・演習内容の理解度と役立ち)

実習初日に事例を提示し、分析・解釈して看護計画を事前に立案することと、沐浴、妊婦健康診査について演習を行っている。その効果を実習後に尋ねたところ、事例の分析が実習時に理解できた学生は21名 (26.9%)、

表3 妊娠期の経過および援助の理解度

n = 78

項目	できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
妊婦の心理状態の理解	27名 (34.6%)	47名 (60.3%)	3名 (3.8%)	1名 (1.3%)
妊娠中の経過の理解	23名 (29.5%)	52名 (66.7%)	2名 (2.6%)	1名 (1.3%)
腹囲・子宮底測定の理解	52名 (66.7%)	21名 (26.9%)	4名 (5.1%)	1名 (1.3%)

表4 実習終了時の理解度および指導などの実施状況

n = 78

項目	できた	まあまあできた	あまりできなかった	できなかった
分娩期の経過の理解	12名 (15.3%)	45名 (57.7%)	17名 (21.8%)	4名 (5.1%)
分娩期の看護の理解	8名 (10.3%)	37名 (47.4%)	21名 (26.9%)	12名 (15.4%)
産褥期の経過の理解	33名 (42.3%)	42名 (53.8%)	2名 (2.6%)	1名 (1.3%)
産褥期の看護の理解	37名 (47.4%)	37名 (47.4%)	2名 (2.6%)	2名 (2.6%)
子宮・全身の復古の理解	39名 (50.0%)	34名 (43.6%)	3名 (3.8%)	2名 (2.6%)
乳房の進行性変化の理解	23名 (29.5%)	43名 (55.1%)	10名 (12.8%)	2名 (2.6%)
新生児の胎外生活への適応の理解	32名 (41.0%)	38名 (48.7%)	7名 (9.0%)	1名 (1.3%)
沐浴の手順・注意する点の理解	61名 (78.2%)	13名 (16.7%)	3名 (3.8%)	1名 (1.3%)
母親の心理面の把握	29名 (37.2%)	44名 (56.4%)	4名 (5.1%)	1名 (1.3%)
母子相互作用の援助の理解	13名 (16.7%)	46名 (59.0%)	14名 (17.9%)	5名 (6.4%)
褥婦の1ヶ月頃までの保健指導	13名 (16.7%)	26名 (33.3%)	27名 (34.6%)	12名 (15.4%)
1ヶ月頃までの新生児期の保健指導	3名 (3.8%)	24名 (30.8%)	31名 (39.7%)	20名 (25.6%)
退院後の褥婦と家族のイメージを持つ	25名 (32.1%)	42名 (53.8%)	8名 (10.3%)	3名 (3.8%)
外来-病棟-外来の連携の理解	45名 (57.7%)	28名 (35.9%)	5名 (6.4%)	0名 (0%)
母性看護過程の展開の理解	19名 (24.7%)	50名 (64.9%)	6名 (7.8%)	2名 (2.6%)

まあまあできた43名 (55.1%)、あまりできなかったは12名 (15.4%)、できなかったは2名 (2.6%)であった。事例の分析が実習時に役に立った学生は56名 (71.8%)、まあまあ役に立った16名 (20.5%)、あまり役に立たなかった5名 (6.4%)、役に立たなかった1名 (1.3%)であった。

演習の内容が実習時に理解ができた学生は28名 (35.9%)、まあまあできた44名 (56.4%)、あまりできなかったは5名 (6.4%)、できなかったは1名 (1.3%)であった。演習の内容が実習時に役に立った学生は66名 (84.6%)であり、まあまあ役に立った11名 (14.1%)、あまり役に立たなかった1名 (1.3%)、役に立たなかったは0名 (0%)であった。

2. 外来実習における理解度

外来実習における妊婦とのかかわりの中で、妊婦の心理状態、妊娠中の経過、腹囲・子宮

底の測定の理解度を表3に示す。

3. 実習終了時の理解度および指導などの実施状況

病棟実習中に習得してもらいたい項目の理解度および実施状況を表4に示した。産褥期の経過の理解、産褥期の看護の理解、子宮・全身の復古の理解、乳房の進行性変化の理解、新生児胎外生活への適応の理解、母親の心理面の把握の理解ができた学生はほぼ90%近くに達している。理解度の低かった項目は母子相互作用の援助 (75.7%)、褥婦の1ヶ月ころまでの保健指導 (50.0%)、1ヶ月ころまでの新生児期の保健指導 (34.6%)であった。

4. 実習中のストレス (複数回答)

実習において78名全員がストレスを感じていた。ストレスと感じていた内容は、不眠66名 (84.6%)、記録68名、知識不足40名 (51.3%)、妊産褥婦との関係4名 (5.1%)、スタッ

フとの関係12名(15.4%)，教員との関係6名(7.7%)であった。

5. 実習が有効であったと思えること(複数回答)

学生全員が実習は有効であったと答えていた。実習が有効であったと思える内容は、国家試験・他の試験に役立つ67名(85.9%)，今後の経験に役立つ66名(84.6%)，看護職として役立つ55名(70.5%)，自分の意識の変化に影響した47名(60.2%)，友人・知り合いへのアドバイスに役立つ36名(46.2%)であった。

6. 実習前学習(事例分析・演習内容の理解度)と関連する項目

実習時の演習内容の理解度と沐浴手順・注意事項の理解の関係では、実習時に理解できていた学生は有意に沐浴手順・注意事項の理解はしていた。(p=.015)妊婦の腹囲・子宮底測定の理解の関係でも、同様に有意に理解していた。(p=.007)

事例の分析を理解していた学生は、妊娠中の経過の理解、産褥期の経過の理解、産褥期の看護の理解が有意に高い結果となった。(p=.002, p<.001, p<.001)また、新生児の胎外

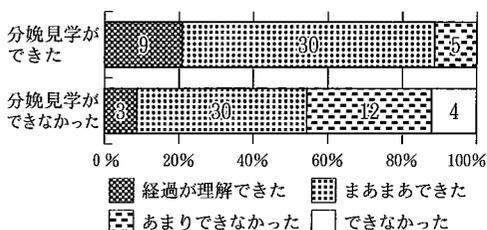


図1 分娩見学の有無と分娩経過の理解度の関係

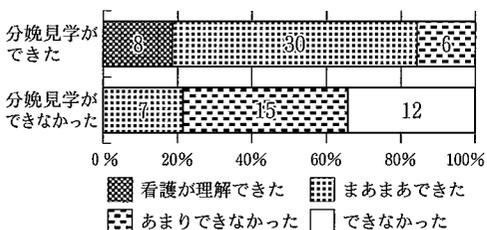


図2 分娩見学の有無と分娩時の看護の理解度の関係

生活への適応では有意差はみられなかったが、沐浴の手順・注意する点で有意に理解できていた。(p=.007)

7. 分娩見学の有無と経過および看護の理解

分娩見学の有無と分娩経過の理解の関係では、図1で示すように分娩見学できた学生はできなかった学生と比較すると、有意に経過の理解ができていた。(p=.001)また、分娩見学の有無と分娩時の看護の理解の関係においても、分娩見学できた学生は見学できなかった学生と比較すると、有意に分娩時の看護を理解できていた。(p<.001) [図2参照]

8. 産褥期の経過の理解と看護の理解の関係

産褥期の経過の理解と看護の理解の関係をみると、実習中に産褥期の経過を理解できた学生は、理解できなかった学生より、有意に産褥期の看護を理解できていた。(p<.001)

9. 産褥期の経過の理解度と関連する項目

産褥期の経過の理解度とそれに関連する項目を表5に示した。子宮・全身の復古の理解、進行性変化の理解、母親の心理面の把握、母子相互作用の援助の実施、退院後の褥婦と家族のイメージを持つ、母性看護過程の展開の理解の項目で相関関係がみられた。産褥期の経過を理解できた学生は、理解できなかった学生と比較すると子宮・全身の復古の理解、進行性変化の理解、母親の心理面の理解ができた割合が有意に高い結果となった。(p<.001, p<.001, p<.001)母子相互作用の援助の実施の割合は全体で75.7%程度であったが、産褥期の経過を理解できた学生は、援助の実施の割合が有意に高かった。(p<.001)退院後の褥婦と家族のイメージを持つことは産褥期の経過を理解している学生が有意に高い結果となった(p<.001)が、経過を理解していてもイメージを持ってない学生もいた。

褥婦の1ヶ月頃の保健指導の実施では、産褥期の経過の理解に関係はあまりみられず、指導を実施できた学生は50.0%であった。また、生後1ヶ月頃までの新生児期の保健指導

表5 産褥期経過・看護の理解との
相関係数

項 目	産 褥 期 の 経 過 の 理 解	産 褥 期 の 看 護 の 理 解
	相 関 係 数	相 関 係 数
子宮・全身の復古の理解	.592**	.707**
乳房の進行性変化の理解	.556**	.575**
新生児の胎外生活への適応の理解	.546**	.560**
母親の心理面の把握	.461**	.552**
母子相互作用の援助の理解	.393**	.387**
褥婦の1ヶ月頃までの保健指導	.229*	.308**
1ヶ月頃までの新生児期の保健指導	.211	.276
退院後の褥婦と家族のイメージを持つ	.512**	.557**
母性看護過程の展開の理解	.448**	.583**

ピアソン相関係数 ** 1%水準で有意(両側)

* 5%水準で有意(両側)

の実施でも産褥期の経過の理解度に関係はなく、実施できた学生は34.6%に留まった。

10. 産褥期の看護の理解度と関連する項目

産褥期の看護の理解度とそれに関連する項目の分析では、子宮・全身の復古の理解、進行性変化の理解、母親の心理面の把握、母子相互作用の援助の実施、褥婦に1ヶ月頃までの保健指導の実施、退院後の褥婦と家族のイメージを持つ、母性看護過程の展開の理解の項目で相関関係がみられた。[表5参照]

子宮・全身の復古の理解、進行性変化の理解、新生児の胎外生活への適応の理解ができた割合が産褥期の看護を理解できた学生は有意に高い結果となった。(p<.001, p<.001, p<.001) また、母親の心理面も有意に理解できていた。(p<.001)そして、母子相互作用への援助の実施との関係をもても、有意に援助が行えていた。(p<.001)また、退院後の褥婦と家族のイメージの関係を見ると、産褥期の看護が理解できている学生は、退院後の家族のイメージを有意に持つことができ

ている。(p<.001)

しかし、褥婦の1ヶ月頃の保健指導の実施と生後1ヶ月頃の新生児の指導の実施の関係をみると有意差はみられなかった。産褥期の看護が理解できている学生の褥婦の1ヶ月頃の保健指導の実施割合は、50.0%に留まり、看護を理解していても実施には結びついていない。産褥期の看護が理解できていない学生は、褥婦の1ヶ月頃の保健指導の実施ができていない。また、産褥期の看護の理解に関係なく、生後1ヶ月頃の新生児の指導を実施している。全体では実施割合が21.8%であるが、その中の57.1%が産褥期の看護の理解している学生であった。

11. 各ストレスの有無と事例分析および産褥期の経過の理解度

不眠によるストレスを感じている学生は66名(84.6%)であった。不眠のストレスの有無と実習時の事例分析の理解度との関係は、不眠のストレスの有無に関わりなく、実習時における事例分析の理解はされており、産褥期の経過・看護の理解もできており、有意差はみられなかった。

実習記録をストレスと感じている学生は68名(87.1%)であった。実習記録のストレスの有無と実習時の事例分析の理解度との関係において有意差はみられなかった。しかし、産褥期の経過を理解していない学生は有意にこのストレスがあった。(p=.024)

自分の知識不足をストレスに感じている学生は40名(51.2%)であった。実習時に事例分析の理解ができていれば、有意に知識不足のストレスがなかった。(p=.001)また、産褥期の経過の理解度との関係では有意差はみられないが、産褥期の看護を理解していれば有意に知識不足のストレスが少なかった。(p=.011)

12. 受け持ち日数と産褥期の経過・産褥期の看護の理解度の関係

受け持ち日数と相関関係がみられた項目はなかった。産褥期の経過の理解度、産褥期看

護の理解度の両方の関係で、有意差は認められなかった。双方とも受け持ち日数3日以上であれば、産褥期の経過・看護は理解ができたと答えている。しかし、新生児の胎外生活への適応の理解と退院後の産褥婦と家族のイメージを持つ2項目において、有意差がみられた。(p=.019, .035)

考 察

病棟実習においては母子1組を受け持ちとして看護を展開するため、褥婦と新生児の2名が対象である。外来実習においても妊婦は一人であるが、胎児の状態も同時に分析していかなければならない。したがって、看護過程における情報の収集・分析、看護計画の立案、援助の実施、評価を2名分行うことになる。また、病棟実習では入院期間が短いため短期間で情報収集と分析を行い、看護計画を立案することが要求される。外来実習においてもその時点で必要な援助を判断しないと次の受診まで1週間から1ヶ月過ぎてしまうため、有効な看護が行えないことになる。そして、個人によって家庭環境や身体的・心理的状态が異なるため、基本をふまえた上で対象に適した援助が必要となる。加えて、他の分野の看護学と比して異なる知識、技術が必要にもなる。このように学生にとって容易ではない実習を効果的に学ぶために、最初の1週間で学内で事例の分析と妊婦健康診査や沐浴などの演習を行いながら、外来実習を行っている。実習時に事例分析を8割強の学生は理解しており、9割強が実習に役に立ったと答えており、演習では9割強が理解し、ほぼ全員が役に立ったと思っている。岡¹⁾は母性看護学実習前の母性看護技術の演習は新生児に関する演習項目では抱き方、寝かせ方、沐浴などであり、妊婦に関しては子宮底測定、腹囲測定、レオポルド触診法などが学生にとって役に立っていることを明らかにしており、同様の結果であった。また、実習終了時の理

解度との関連においても演習内容の理解度により演習で行っている項目にある沐浴手順・注意事項の理解や妊婦の腹囲・子宮底測定の理解に有意差がみられ、事例分析の理解度により妊娠中の経過の理解、産褥期経過の理解、産褥期の看護の理解に差がみられた。谷口ら²⁾は「学内で行われた看護過程の展開演習は、基本的な看護過程の展開方法と総合的なアセスメントの考え方を学ぶ機会となった」と述べており、事例の分析を行うことで病棟実習でのアセスメントに活用されていると考えられる。これより実習前の学内演習と事例分析は必要であり、学びに効果的であると考えられる。しかし、少数ではあるが実習時に理解されておらず、実習に役に立たなかったと答えている学生がおり、それにより学びとなっていないことが言える。したがって、演習時および事例分析時に意義を伝え、実習をイメージできるようなかかわりが必要である。また、実習内容、学習到達目標にあった内容の演習、事例分析を提供していくことが重要であると考ええる。

外来実習においては妊娠経過、妊婦の心理状態、妊婦の腹囲・子宮底の測定のどの項目においても95%以上の学生が理解しており、前述したように実習前の学内演習および事例分析の効果が伺える。病棟実習を行いながら外来の実習を分散して実施していたものを、平成20年度より2週間の実習期間うち1週間で学内演習、事例分析、外来実習、両親学級の見学にあてたため、外来実習に集中して取り組めることが学習効果につながっていると考える。また、実習施設の外来診療環境が個室となっており、対象妊婦の了承の上で妊婦健康診査の実施、指導場面の見学で妊婦と関わることができ、さらに臨床スタッフから個別に指導を受けられることも要因の1つにあげられる。徳田ら³⁾が「正常な経過をたどる妊婦と実際に接することで対象に理解が深まる」と述べているように、直接妊婦と関わり

をもつことで対象を理解でき学びにつながっている。外来実習方法の変更に伴い記録用紙を変更したことにより、学習の振り返りをする機会ができたことも効果をあげていると考える。

分娩の経過および看護の理解は分娩見学の有無により有意差がみられ、分娩見学を実際に行うことが経過と看護の理解に効果的であると言える。言い換えれば、分娩見学を行えなかった学生は理解しづらいことが考えられる。我々の先行研究⁴⁾においても同様の結果が得られており、対処していかなければならない継続した課題である。新生児計測、胎盤計測は4割から6割が見学しているが、これらにおいても分娩見学と同様に、見学の有無により目的や方法などの理解度に差が出てくる可能性が考えられた。また、分娩見学が行ってもその時点で援助が行えた学生は4割強であり、全員が分娩時の看護を理解し実施することは分娩の状態、学生の事前学習の状態も関係するため難しい現状である。実習形態の変更により分娩室実習をなくしたことで、分娩見学を行える機会がより少なくなり全員の学生が見学できることは難しくなっている可能性はある。したがって、臨床指導者との連携をとり、分娩見学を行える環境調整がより必要であると考え。今泉ら⁵⁾は、「一人の学生が体験した学びを共有し、他の学生がついた意見することで学習効果が得られることが示唆された」と述べており、見学できなかった学生に対して、見学できた学生から情報交換が有効に行えるように配慮することが大切であると考え。

産褥経過の理解度と看護の理解度には相関関係がみられ、経過を理解している学生は有意に看護も理解していた。また、この2項目は子宮復古などの退行性変化や乳房の進行性変化の理解、母親の心理面の把握、母子相互作用の援助、新生児の胎外生活への適応の理解、退院後の褥婦と家族のイメージを持つに

も相関関係がみられた。このことより、産褥の経過・看護の理解ができていると母親の身体的・心理的・社会的変化の理解と新生児の身体的変化の理解ができ、援助を行える可能性が高いと言える。したがって正常な産褥婦・新生児の経過を理解しておくことが重要であり、講義の中で理解できるように考慮していくことが大切である。看護を理解できたと答えている学生は多いが、実際の看護を実施するとなると困難な面がある。特に授乳や育児指導は個別性がある援助項目であり、学生ではイメージしにくく応用が利かれないと思われる。講義では一般的なことは教えているが、臨地実習の場面で目的や効果を確認し、講義内容と結び付けられるように関わっていくことが必要である。褥婦・新生児について理解・援助が行えている項目が多い中で、褥婦・新生児の1ヶ月頃までの保健指導の実施となると半数の学生が行えていないことより、現在おこっていることは理解できても今後の状態をイメージすることができず必要な援助につながらないことが考えられる。そのため事前の十分な準備を行うと同時に、外来実習で行う1ヶ月健診見学の学習内容を有効に結び付けられるように記録内容の検討および実習指導者・教員の関わりで学習を深めていくことが必要である。受け持ち日数と相関関係を示す項目はほとんどみられず、理解度や援助の実施は期間の長短には関連しないと考えられる。しかし、新生児の胎外生活への適応過程の理解と退院後の産褥婦と家族のイメージを持つ2項目においては受け持ち日数により有意差がみられ、日数が短いことで学習効果が得られない可能性が考えられた。より実習効果が上がるように、実習指導者と連携をとり分娩時から受け持ちが行えるように調整するとともに、表ら⁶⁾が「カンファレンスにおける実習指導者の役割としては、学生のそれまでの経験を理解し活かせるような実習方法や、未経験の学生が経験した学生と同じよう

な学びを得られるような場を提供することが重要である」と述べているように、期間が短い場合にはカンファレンスなどで補うような支援を行うことが必要である。

学生は全員が何らかのストレスを、大なり小なり抱えて実習を行っていることが明らかとなった。ストレスは実習効果を低下させる要因の1つであると考えられる。実習時の事例分析の理解度と知識不足によるストレスと産褥経過の理解度と記録によるストレスにおいて相関関係がみられ、産褥期の看護を理解していれば有意に知識不足のストレスが少ない結果であることより、事前学習と実習に向けた準備がストレスを軽減し、実習の学習効果を高めることにつながる。また、学生自信がストレスとなっている実習での困難を解決する方法を考えることも必要であり、解決できることも実習の達成感につながると考える。そのため学生が自ら考えることができるように課題を明確にするなどの支援を行い、解決に至らなかった場合にも学生の成長を促せるように継続してサポートしていく必要がある。

実習における効果・学びの状態として、妊娠・分娩・産褥期の経過と看護を理解できた学生が多数であった。また、看護職として役に立つ、自分の意識の変化に影響したなどの理由により学生の全員が母性看護学実習は自分にとって有効であったと答えている。このことにより、実習目標、目的の内容はある程度達成されていると考えられる。しかし、前述した要因により達成できていない学生がいるため、実習をイメージできるように事例分析や演習だけでなく、講義の段階から関わることで理解を促し、看護の学びにつながると考える。

結 論

1. 実習前の学内演習と事例分析は必要であり、学びに効果的であると考えられる。実

習に活用できなかった学生には、演習時および事例分析時に意義を伝え、実習をイメージできるようなかかわりと実習内容、学習到達目標にあった内容の演習、事例分析を提供していくことが必要である。

2. 外来実習においてはどの項目においても多数の学生が理解しており、実習前の学内演習および事例分析の効果が伺えた。外来実習に集中して取り組めることが学習効果につながっている。また、実習施設の外来診療環境が個室となっており、いろいろな場面で妊婦と直接関わるができることと臨床スタッフから個別に指導を受けられることが要因にあげられる。
3. 分娩見学を実際に行うことは経過と看護の理解に効果的であった。したがって、臨床指導者との連携をとり、分娩見学を行える環境調整がより必要である。また、見学できなかった学生に対して、見学できた学生から情報交換が有効に行えるように配慮することが大切である。
4. 産褥の経過・看護の理解ができていると母親の身体的・心理的・社会的変化の理解と新生児の身体的変化の理解ができ、援助を行える可能性が高いと言えた。したがって正常な産褥婦・新生児の経過を理解しておくことが重要であり、講義の中で理解できるように考慮していくことが大切である。
5. 受け持ち日数と理解度や援助の実施は受け持ち期間の長短には関連しないと考えられる。より実習効果が上がるように、実習指導者と連携をとり分娩時から受け持ちが行えるように調整するとともに、期間が短い場合にはカンファレンスなどで補うような支援を行うことが必要である。
6. 学生は全員が何らかのストレスを、大なり小なり抱えて実習を行っていることが明らかとなった。事前学習と実習に向けた準備がストレスを軽減し、実習の学習効果を高めることにつながる。

ま と め

今回の調査により、現在実施している母性看護学の臨地実習内容は学習において有効である可能性が高いと考えられた。しかし、学習効果が上がらない要因が考えられたため、それに対処できるように見通しを持って講義を行うようにし、実習前の調整や実習中の対応を教員が行っていく必要性が明らかとなった。したがって2週間という短期間の実習の中で、学生が母性看護を理解でき学習効果が上がるように教員、実習指導者が連携していくことが重要である。

今後の課題として、今回調査した理解度は学生の主観であるため、実習成績や実践内容と照らし合わせて評価することが必要である。また、学習効果が上がるように対処した後の評価を行うことが必要であると考えられる。

文 献

- 1) 岡宏美：母性看護学実習における学内演習の検討。新見公立短期大学紀要, 28, 109-114, 2007.
- 2) 谷口通英, 服部律子, 布原佳奈, 他：母性看護の看護過程の展開に必要な学習プロセスと臨地実習との関連。岐阜県立看護大学紀要, 7(2), 19-24, 2007.
- 3) 徳田眞理子, 甲斐寿美子：母性看護学実習後における学生の意識変化。帝京平成看護短期大学紀要, 16, 61-65, 2006.
- 4) 谷口美智子, 西村理恵, 北林ちなみ, 中山美香, 他：母性看護学実習における分娩見学の現状と実習指導の一考察。飯田女子短期大学紀要, 23, 179-189, 2006.
- 5) 今泉玲子, 檀原いづみ：母性看護学実習

における学生の看護実践の現状と今後の課題。看護・保健科学研究誌, 8(1), 199-204, 2008.

- 6) 表五月, 谷本恵理, 高島佐代子, 他：母性看護学実習における実習指導者のかかわり。学生カンファレンスと学生の学びから考える。香川県立保健医療大学紀要, 1, 141-145, 2004.

参 考 文 献

- 1) 一花詩子, 福山浩美, 稲尾公子：母性看護実習における看護技術体験状況。学生の技術体験録より。埼玉医科大学短期大学紀要, 20, 3-83, 2009.
- 2) 都竹友季子, 野田貴代, 出口睦雄：看護学生の母性看護学実習に対する意識調査(第1報)実習前の学生が望む実習内容と指導方法。愛知きわみ看護短期大学紀要, 5, 9-55, 2009.
- 3) 野田貴代, 出口睦雄, 都竹友季子, 日置育子：学生が母性看護学実習で感じることと望む指導方法。愛知きわみ看護短期大学紀要, 3, 1-19, 2007.
- 4) 津間文子, 井田歩美, 四宮美佐恵：母性看護学臨地実習における学習効果の検討。演習・学習会の位置づけの変更。看護・保健科学研究誌, 8(1), 187-197, 2008.
- 5) 徳田眞理子, 甲斐寿美子：母性看護学実習後における学生の意識変化。帝京平成看護短期大学紀要, 17, 21-25, 2007.
- 6) 成田恵美子, 渡邊竹美, 糠塚亜紀子, 他：母性看護学実習における学生の看護技術経験の認識に関する調査。秋田大学医学部保健学科紀要, 15(1), 58-67, 2007.

【資料】

母性看護学実習終了後アンケート

母性看護学実習における学びの到達度を知るためと、来年度の実習の参考にするためにアンケートに回答してください。

アンケートへの参加は自由で無記名となっており、回答の有無による不利益を受けることはありません。得られたデータをもとに今後の課題などを整理し、実習の方法などを検討のうえ発表したいと思っています。ご協力をよろしくお願いします。

1. 学内での演習についてあてはまる番号に○をしてください。

実習初日に演習を行いました、実習時に理解できていましたか

できた	まあまあ できた	あまり できなかった	でき なかった
1	2	3	4

実習1週目にペーパーペイシェントを行いました、実習時に理解できていましたか

1	2	3	4
---	---	---	---

実習初日に演習を行いました、実習時に役に立ちましたか

役に 立った	まあまあ 役に立った	あまり 役に立た なかった	役に 立た なかった
1	2	3	4

実習1週目にペーパーペイシェントを行いました、実習時に役に立ちましたか

1	2	3	4
---	---	---	---

2. 外来実習についてあてはまる番号に○をしてください。

妊婦の腹囲・子宮底計測が理解できましたか

できた	まあまあ できた	あまり できなかった	でき なかった
1	2	3	4

妊娠中の経過が理解できましたか

1	2	3	4
---	---	---	---

妊婦の心理的状态が理解できましたか

1	2	3	4
---	---	---	---

3. 分娩の見学・分娩時の援助についてあてはまるものに○をしてください。

a. 分娩を見学ができましたか どの時期でしたか	はい	いいえ
	(第1期・第2期・第3期・第4期)	
b. 分娩時援助を行なえましたか (腰をさする、手を握る、励ますなど)	はい	いいえ
c. 新生児計測を見学ができましたか	はい	いいえ
d. 胎盤計測を見学ができましたか	はい	いいえ

4. 病棟実習の受け持ち褥婦についてあてはまるものに○をしてください。

a. 受け持ち期間は何日間でしたか	2日	3日	4日	5日
b. 初産経産の別はどうでしたか	初産婦		経産婦	
c. 分娩形態はどうでしたか	経膈分娩		帝王切開術	

5. 実習中、ストレスを感じたことはありましたか。あてはまるものすべてに○をつけてください。

- a. 無 い
- b. 不 眠
- c. 記 録 (特に何ですか)
- d. 妊産褥婦との関係
- e. スタッフとの関係
- f. 教員との関係
- g. 知識不足 (何についてですか)
- h. その他 ()

6. 実習全期間を通して、以下のことが行えましたか。あてはまる番号に○をしてください。

	できた	まあまあ できた	あまり できなかった	できな かった
	1	2	3	4
分娩期の経過が理解できましたか				
分娩時の看護が理解できましたか				
産褥期の経過が理解できましたか				
産褥期の看護が理解できましたか				
産後の子宮・全身の復古について理解できましたか				
乳房の進行性変化を理解できましたか				
新生児の胎外生活への適応について理解できましたか				
新生児の沐浴の手順・注意する点について理解できましたか				
母親の心理面の把握はできましたか				
母子相互作用への援助を考えましたか				
褥婦の1ヶ月頃までの保健指導ができましたか				
褥婦に1ヶ月頃までの新生児期の保健指導ができましたか				
退院後の褥婦と家族のイメージを持つことができましたか				
外来(妊婦健診)－病棟(出産・産褥)－外来(1ヶ月健診)といった連携は理解できましたか				
母性看護過程の展開は理解できましたか				

北林・中山：母性看護学実習における学びの評価とそれに関連する因子

7. 母性看護学実習を終え、この実習が有効であったと思えることはありますか。(複数回答可)
- a. 看護職をしていく上で役に立つ。
 - b. 国家試験・他の試験に役に立つ。
 - c. 自分が今後経験していくであろう分娩・育児において参考になる。
 - d. 友人・知り合いなどにアドバイスができる。
 - e. 自分の意識の変化の上で役に立った。
 - f. な い
 - g. その他 ()
8. 実習にあたって知っておきたかったことがありましたら記入してください。
9. 実習のスケジュール(外来・学内1週間と病棟1週間)について意見がありましたら記入してください。
10. その他要望がありましたら記入してください。(授業との連動・実習中に経験したかったことなども含む)

ありがとうございました。